

ひたちなか 埋文だより 40



平磯海岸で貝を観察する 千葉県立中央博物館の黒住耐二さん指導のもと、平磯海岸を観察しました。そこには、縄文時代の人々が食糧にした貝類が生息しています。巻貝にもさまざまな種類があり、それぞれに名前が付けられています。誰の網膜にも同じ像が映っているはずなのに、区別がつかない。視神経から脳中枢へと伝達された信号の解読に、鍛練の差がでます。学ぶということの醍醐味を、そこに感じるのです。

(2013.10.5 撮影 ふるさと考古学⑥貝の考古学)

CONTENTS

第11回企画展 常陸国の須恵器生産／公開講座「ひたちなか市の考古学」第7回

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第12回 勝田市の遺跡の調査(5) (川崎純徳)

展示資料紹介 ひたちなか市出土の大刀-X線写真撮影調査報告一 (稲田健一)

開館20周年記念講演会 「馬渡埴輪製作遺跡の調査」

ひたちなか市内の発掘調査2013

横穴墓を歩く⑪ 清戸迫横穴墓 (吉野高光)

1ケース・ミュージアム29 三ツ塚古墳群

1ケース・ミュージアム30 いただきもの。2

足崎・小鍋沢遺跡の縄文土器 (飛田英世)

ひたちなか市の古墳③ 那珂湊地区の古墳群

歴史の小窓⑫ 硯として使う

ほか

第11回企画展

常陸国の須恵器生産

— 最近の調査・研究から

2014年1月26日(日)～5月11日(日)

公益財団法人 ひたちなか市生涯・文化・スポーツ公社

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 第11 企画展

常陸国の須恵器生産

— 最近の調査・研究から

日時 平成 26 年 1 月 26 日 (日) ～ 5 月 11 日 (日)

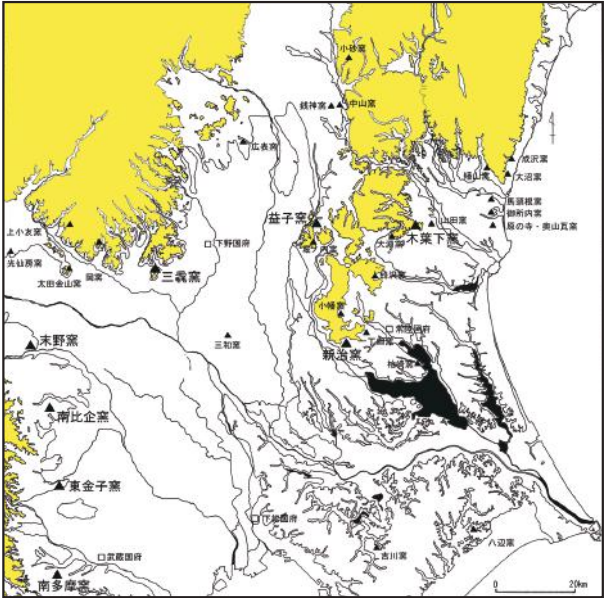
休館日 月曜日 (祝日の場合は翌日)

開館時間 午前 9 時～午後 5 時 (入館は午後 4 時 30 分まで)

入場無料

場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市南 3-6-9 ☎ 029-276-8311



須恵器窯跡の分布

この展示では、ひたちなか市内の遺跡から多く出土している須恵器についての理解を深めるため、県内の須恵器窯跡から出土した遺物を展示し解説いたしました。特に今回の展示では、常陸国における奈良・平安時代の須恵器生産に関する近年の調査・研究の成果とその意味を考えてみました。

常陸国の須恵器窯跡 常陸国の須恵器窯跡は一二か所が知られています。それらは七世紀から九世紀の窯跡です。ただし集落調査の出土須恵器からみて、県内にはまだ多くの発見されていない須恵器窯跡が存在することがわかっています。

常陸国の須恵器窯跡の年代

年代	久慈郡	那賀郡	新治郡	茨城郡	筑波郡
600	幡山2号窯	木葉下窯跡群	堀ノ内窯跡群	柏崎窯	新治窯跡群
650		馬頭根窯			
675		山田2号窯			栗山窯
700		御所内窯			
725		原の寺瓦窯跡付近(古)	高取山支群細田窯 高取山支群A地点1・4号窯 高取山支群B地点1・2号窯 高取山支群E地点2・8号窯	一丁田1・2号窯	永井寄居窯
750		原の寺瓦窯跡付近(新)	高取山支群C地点1～4号窯 高取山支群E地点1・3・4・7・10・12・15～18・20・21号窯 高取山支群打越窯 高取山支群C地点5号窯 高取山支群E地点19号窯 三ヶ野支群大野入1号窯 金山支群細入窯 金山支群堂の内茅場窯(古) 高取山支群四又入窯	花見堂支群1号窯 花見堂支群4号窯	東城寺寄居前窯A単位群 東城寺窯
775	成沢窯	大淵窯跡群七耕地支群1号窯 大淵窯跡群肥前塚支群(古) 大淵窯跡群肥前塚支群(新)	花見堂支群3号窯 花見堂支群2号窯	岩間窯跡群蜂沢窯 (仮称)小幡窯(古) (仮称)小幡窯(新)	東城寺桑木窯 小高村内窯
800					東城寺寄居前窯B単位群
825		三ヶ野支群瓶焼土2号窯			小野1号窯
850		金山支群堂の内茅場窯(新)			
875					



展示のようす

須恵器窯は一度に大量の製品を焼きあげるため、大量の燃料を必要とします。したがって長期間継続して生産を行っていた大規模窯跡群は、燃料となる大量の樹木が確保できる山すそに立地しています。常陸国は平野のなかに筑波山塊が南方につき出す地形的特徴を持っています。その山地縁辺部に距離を置いて大規模な窯跡群が成立し、それぞれが常陸国の需要を担ったのです。

奈良時代が終わりを迎えるころには、各地で台頭してきた有力者のもとで小規模な生産地があちこちに成立します。そうした窯跡は大規模窯跡群での生産者が関わって成立するようです。たとえば今回展示の(仮称)小幡窯跡や蜂沢窯跡は新治窯跡群から派生し、大淵窯跡群は木葉下窯跡群から派生したと考えられます。

九世紀末に須恵器大甕生産が終わりを迎えると、須恵器という固い焼き物を窯で焼く必要がなくなりました。その結果、しだいに土師器生産が土器生産の中心となっていく、須恵器窯は終わりを迎えることになります。

新発見の窯跡 常陸国には未発見の窯跡が多数眠っているものと考えられますが、時々、偶然のきっかけで窯跡が発見される場合があります。

最近では、二〇一三年の石岡市瓦塚瓦窯跡の調査で、瓦窯跡の調査中に須恵器窯が発見されています。また、同じ年には、それまで全く須



石岡市(仮称)小幡窯跡

恵器窯が予想されていなかった石岡市小幡地区においても、多くの須恵器窯が発見されました。

(仮称)小幡窯跡では、須恵器のほかに瓦も採集されていますので、須恵器窯跡と瓦窯跡が存在するものと考えられます。時期は須恵器からみて八世紀末から九世紀初め頃でしょう。須恵器は新治窯の製作技法と同じであることから、窯跡の成立には新治窯工人が関わるようです。今後、当窯の製品が常陸国府を中心として広く流通することが確認できれば、窯跡の脇を通る古代道や恋瀬川を利用して国府へ運びだしていたことになり、常陸国府の土器研究にとって重要な窯跡になることでしょう。

ところで少し前のことになりますが、東海村では二〇〇〇年に、造成工事中に御所内窯跡が発見されました。この窯跡は、すぐに発掘調査が実施され報告書が刊行されています。

七世紀末の須恵器窯跡が東海村で発見されたことは、全く予想外のことでした。この発見は、ひたちなか市原の寺瓦窯跡・奥山瓦窯跡の成立を考えるうえで大変重要なことです。奈良時代前半の須恵器窯は、七世紀後半に須恵器窯が操業されて、ある程度の技術を習得した工人がいた地域で成立する場合が多く、原の寺瓦窯跡も御所内窯跡のような前代の須恵器生産を担った工人が関わりながら成立した可能性を考える必要があるでしょう。

研究の新展開 ひたちなか市の集落遺跡から出土する須恵器は、水戸市木葉下窯跡群の製品が多くを占めますが、その木葉下窯跡群では最近の調査・研究により、特に成立期について研究の新展開がみられます。

二〇〇五年の台渡里遺跡の調査では、山田窯跡で焼かれたと思われる七世紀末の須恵器が多数出土しました。このように山田窯で生産された須恵器は、台渡里廃寺の造営に関係する台渡里遺跡に供給されましたが、おそらく付近に存在したと推定される那賀評家へも供給されたと考えられます。山田窯跡は那賀評家周辺で使用する須恵器を生産するために成立し、その後、台渡里廃寺の造営に伴い、瓦の生産も行おう

になったのではないかと考えられます。

ところで、山田窯跡群と木葉下窯跡群をつなぐ八世紀初めの資料である木葉下窯跡群細田窯跡採集遺物が、二〇〇四年に『茨城県考古学協会誌』第一六号において明らかになりました。細田窯跡は、山田窯跡の操業終了後すぐに開窯した窯であろうと思われます。細田窯跡の登場によって、山田窯跡から木葉下窯跡群へと窯が継続して操業されたことがより明確になりました。このことは、細田窯以後二百年間にわたって生産が継続する木葉下窯跡群が、山田窯跡の工人が関わって成立したことを物語っています。



水戸市山田窯跡第2号窯断面

す。木葉下窯跡群が、山田窯跡よりも西方の山のなかに窯場を移して操業を始めた理由は、木葉下窯跡群は山田窯跡とは異なり、一般集落への供給を目的として開窯された窯で、長期にわたる操業が想定されていたため、山のなかに窯場を移し十分な燃料が確保できるようにして、継続操業を開始したからと考えられます。なお、木葉下窯跡群の製品は、窯跡群の南に東西方向に通っていたであろう官道を利用して、那賀郡衙方面へ運び出したものと推測されます。

既存資料の再検討 二〇一一年の『埋文だより』三五号において、ひたちなか市原の寺瓦窯跡と奥山瓦窯跡から出土した須恵器を再検討した際に、瓦と同じ粘土で焼かれたと思われる須恵器が複数見つかりました。おそらく瓦窯跡周辺に未発見の須恵器窯跡が存在するものと考えられます。このように再検討によって既存資料の再評価がなされる場合があります。

このほか笠間市蜂沢窯跡出土須恵器が『婆良岐考古』誌上で資料紹介されることで、それまで内容が不明であった岩間窯跡群の様相の一端が明らかにされたことにも注目してみました。出土した遺物を「資料化」することにより、様々な可能性を検討することが可能となります。「新たな資料化」は既存資料の再評価にとってとても重要なのです。

(佐々木義則)

公開講座「ひたちなか市の考古学」第七回 古代土器の生産と流通

二〇一四年二月十六日から三月九日の毎週日曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学」第七回「古代土器の生産と流通」を開催しました。三名の研究者をお招きし、土器の生産と流通の研究についてお話しいただきました。なお、今回の講座は、後日、記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2/16 (日)	茨城県木葉下窯跡群産須恵器の生産と流通	(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 佐々木 義則
2/23 (日)	埼玉県南比企窯跡群産須恵器の生産と流通	大東文化大学 渡辺 一 氏
3/2 (日)	バリ島における土器の生産と流通	早稲田大学 余語 琢磨 氏
3/9 (日)	群馬県域の土器の生産と流通	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 桜岡 正信 氏



群馬県埋蔵文化財調査事業団
桜岡 正信氏

「深谷とか伊勢崎といった利根川をはさんだ一帯の地域が、武蔵型甕の生産場所じゃないかなと考えています。それが広範囲に分布したというのは、高機能なので、商品として出回った可能性が高いと思っています。」



早稲田大学
余語 琢磨氏

「流通圏が王国の範囲と一致しているのはすごく興味深いんですが、王様がそういうふうにしたと考えるのは、早とちりだと思っています。なぜかというバリ島の物の流通というのは、すごく地形に規制されます。」



大東文化大学
渡辺 一氏

「勝呂廃寺をつくるための瓦を焼くために窯が必要になって、専門工人を東海地方から呼んでつくらせたんですが、自分たちで作っていく道が切り開けて工人集落をつくった。なおかつここに交易の集落が出来上がった。」

歴史の小窓 その一二

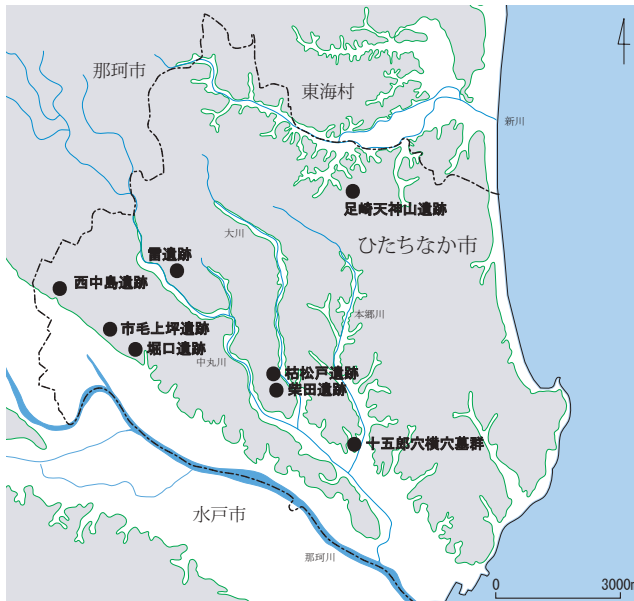
硯として使う

古代の集落遺跡を発掘していると、有台の杯や盤の底部を逆さにし、硯として使っているものが、時々出土します。私たちはそれを「転用硯」と呼んでいます。



ひたちなか市武田西堀遺跡四〇号住居跡の床に、硯に転用した須恵器有台杯が置かれていました。ここで、この器に残された痕跡から、ちよつと想像してみましょう。

ある日、使い始めてまもない器の口が割れてしまいました。底部はまだきれいだっただので、あとで硯として利用しようと考え、底部周辺をきれいに打ち欠き、とっておきました。やがて祭礼の日がやってきました。その日、神様へお供えをする人の名前を、お供え物を盛り付ける土器に書くのです。そこで、棚にあつた転用硯を取り出して使いました。底部外面を砥石で簡単に研磨したあと、その部分で墨をすりました。そして入り口近くの明るい場所で、土器に自分の名の一字を記したのです。・・・ちよつと想像し過ぎたようです。(佐々木義則)



二〇一三年度は、ひたちなか市内においては市内遺跡調査のほか、十五郎穴横穴墓群の範囲確認調査がありました。市内遺跡調査では、西中島遺跡で古墳時代後期と平安時代の住居跡が調査され、土師器の杯や甕などの遺物が出土しました。また堀口遺跡では、古墳時代中期と平安時代の住居跡が調査され、墨書土器や砥石などが出土しました。十五郎穴横穴墓群の範囲確認調査は遺跡西部を中心に試掘調査が実施されたことにより、全体的な様相の解明へより近づくことができました。

(佐々木義則)

2013 (平成25) 年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	次数	所在地	月	種別	調査内容
1	雷遺跡	2 次	東石川	5 月	試掘	溝 1 条を確認。遺物なし。
2	西中島遺跡	4 次	津田	6 月	試掘	住居跡 2 基 (古墳 1, 平安 1) を確認。縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・石器が出土。
3	堀口遺跡	13 次	堀口	7 月	試掘	住居跡 2 基 (古墳) を確認。土師器・鉄製品が出土。
4	市毛上坪遺跡	13 次	市毛	7 月	試掘	住居跡 1 基 (古墳前期) を確認。土師器が出土。
5	西中島遺跡	5 次	津田	8 月	本調査	住居跡 2 基 (古墳 1, 平安 1) を調査。土師器・須恵器・近代瓦・磁器が出土。
6	枯松戸遺跡	3 次	中根	11 月	試掘	溝 1 条を確認。弥生土器が出土。
7	雷遺跡	3 次	東石川	11 月	試掘	住居跡 2 基 (古墳) を調査。土師器が出土。
8	堀口遺跡	14 次	堀口	12 月	試掘	住居跡 2 基 (古墳中期 1, 平安 1), 溝跡 2 条を確認。土師器・須恵器が出土。
9	堀口遺跡	15 次	堀口	2 月	本調査	住居跡 4 基 (古墳中期 1, 平安 3), 溝跡 1 条を調査。土師器・須恵器・砥石・鎌が出土。
10	柴田遺跡	4 次	中根	2 月	試掘	住居跡 2 基 (縄文), 土坑 4 基 (縄文) を確認。縄文土器が出土。
11	足崎天神山遺跡	1 次	足崎	3 月	試掘	遺構・遺物なし。



第 VI-1 号墓玄室 (礎敷)



第 III-4 号墓土器出土状況

二〇〇七年度から開始された調査は、いよいよ大詰めを迎え、十五郎穴横穴墓群の全体像が明らかになりつつあります。

(稲田健二)

十五郎穴横穴墓群の調査 今年度の十五郎穴横穴墓群の範囲確認調査は、笠谷支群を対象に実施しました。この地区の横穴墓の調査は初めてとなります。トレンチによる調査の結果、新たに横穴墓を三八基確認することが出来ました。この結果から、笠谷支群では横穴墓が五三基あることが判明しました。また、十五郎穴横穴墓群の西端を確定することが出来たことで、当横穴墓群の横穴墓の分布範囲も判明しました。その他の成果としては、昨年度の調査で初めて確認された玄室内の礎敷を第 VI-1 号墓でも確認できたことや、笠谷支群で初めて横穴墓に伴う遺物を検出することが出来ました。遺物は第 III-四号横穴墓の墓前域から出土した須恵器の無台杯形土器二点です。時期は八世紀第二四半期頃と推定されます。

堀口遺跡の発掘調査

堀口遺跡は、ひたちなか市堀口にある、弥生時代から平安時代にかけての集落跡です。この遺跡では多くの発掘調査が実施されてきており、今回の調査は第15次調査となります。古墳時代中期の住居跡が1基、平安時代の住居跡が3基調査されました。

古墳時代中期の住居跡は、部分的な調査でしたが、真っ赤に焼けた炉跡が確認されました。遺物は、試掘調査の際に出土した杯のほか、今回の調査では、高杯の破片も出土しました。

また、平安時代の住居跡は、一辺3～4mほどの大きさの竪穴住居跡でした。土器や砥石、鎌などが出土しています。出土した土器を洗ってみたところ、「武田新」という文字が書かれた土器がありました。堀口遺跡は、古代武田郷内に位置すると考えられていますので、「武田」は武田郷のことではないかと思われます。



では「新」は何を示しているのでしょうか。今回の調査地は、小字名が「新地坪(あらちつぼ)」といっています。「新」が、この「新地坪」を示しているとなると、この地名は古代ま

で遡ることになります。

以前、武田遺跡群の調査でも、「久保」という小字名を記した墨書土器が出土したことがあります。私たちがふだん使っている地名は、古代まで遡るものが意外と多くあるのかもしれない。



平安時代の住居跡の調査

西中島遺跡の発掘調査

西中島遺跡は、ひたちなか市津田にある、縄文時代から平安時代にかけての遺跡です。この遺跡でいまままでにおこなわれた発掘調査では、縄文時代後期の土坑や、古墳時代後期・奈良時代・平安時代の住居跡などがみつかっています。

2013年度は、8月から9月にかけて、住宅建築の事前調査が実施され、その結果、古墳時代後期の住居跡1基と、平安時代の住居跡1基が調査されました。

古墳時代後期の第1号住居跡は、一辺4.5mほどの竪穴住居でした。出土遺物は土師器杯・甕のほか、甕を竈に据える際に台として使う「支脚」が竈から出土しました。

ところで、この遺跡の近くまで、小さな谷が那珂川低地から入り込んでいて、その谷頭はジメジメしていました。どうやら、かつてそこに湧水があったようです。飲み水の確保は、古代の村にとってとても重要なことです。井戸を持つ古代の村はごく少数なので、村の近くの湧水は、とても大切にされたことなのでしょう。現在、そのすぐ近くに神社があることも、もしかすると、この湧水と関係していたのかもしれない。



調査のひとこま

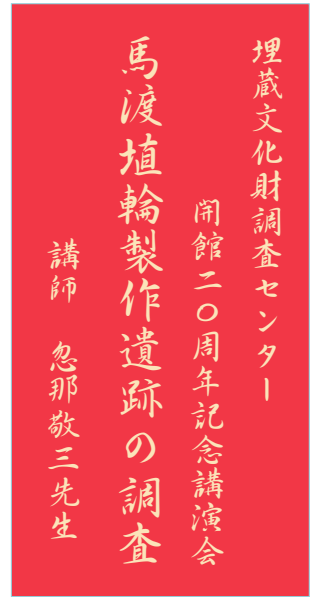
午後になると、隣の家の影が竪穴住居跡を覆います。強烈な夏の日差しをさえぎってくれて、これは本当に助かりました。ありがたや～



事前に聴講を申し込まれた方々が多数来場され、忽那敬三先生による埴輪の基礎知識から、発掘調査の話、埴輪の種類などのわかりやすく興味深い話に聞き入り、充実した二時間を過ごされたのでした。

(栗田昌幸)

埋蔵文化財調査センターは一九九三年一二月に開館して今年度は開館二〇周年にあたります。これを記念して二〇一四年一月二五日(土)に明治大学博物館学芸員であり当市の史跡保存対策委員会の委員でもあります忽那敬三先生^{くつなけいさう}を講師としてお迎えし、「馬渡埴輪製作遺跡の調査」と題した記念講演会と、それに関連した展示をしました。展示では、修復部分に経年劣化の見える馬渡埴輪製作遺跡出土の埴輪を、国庫補助事業で修復したものなどを参考展示しました。当日は寒空の下、



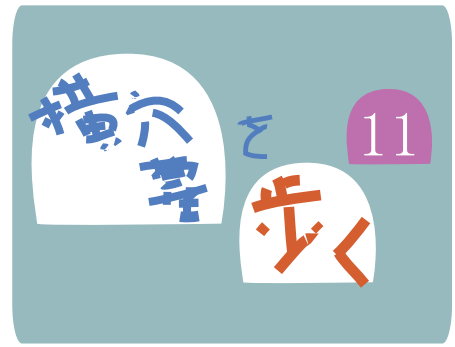
調査中の大塚初重先生（右）



A 地区発掘調査の様子（1965年）



ワンケース・ミュージアム 31 「絵になる埴輪」
(ポスター・チラシには池谷勝利氏の作品を使用しました)



福島県双葉町
きよとさく
清戸迫横穴

吉野 高光
(双葉町教育委員会)

史跡・清戸迫横穴は、福島県双葉郡双葉町大字新山字清戸迫三〇四一一に所在する。前田川の右岸、海岸平野の奥部に位置し、海岸から直線で二・五kmの標高約四〇mと清戸迫横穴墓群の中で最も高い丘陵斜面に占地している。

清戸迫横穴墓群の最初の調査は、昭和二五年の八号横穴墓の調査に始まる。玄室からは頭椎大刀^{けいこうこぎね}、挂甲小札、鉄斧、勾玉、土師器^{はじき}など当地の横穴墓としては多くの副葬品が出土した。昭和三五年に初めて横穴墓の分布調査が行われ、横穴墓二四基、墳丘三基を確認している。

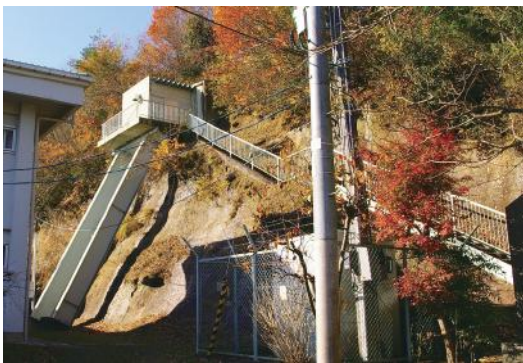
昭和四二年には双葉南小学校新築工事に伴う発掘調査で横穴墓五三基、墳丘四基の調査を行ってゐる。掘削工事中、未確認であった七六・七七号横穴墓の二基の横穴墓が発見された。うち七六号横穴墓(清戸迫横穴)からは壁画が発見(一一月三日)され、翌年五月一日に国史跡に指定された。

清戸迫横穴は、掘削工事によって墓前域が破壊されたが、辛うじて玄門から玄室部分が残った。玄室の平面形は幅二・八四m、奥行五・一五mのほぼ方形であり、高さは一・五六mで断面形はかまぼこ型を呈している。玄室内には副葬品は見られず、墓前域も破壊されたことで造営時期は判断できないが、六世紀末から七世紀前半の時期が想定されている。

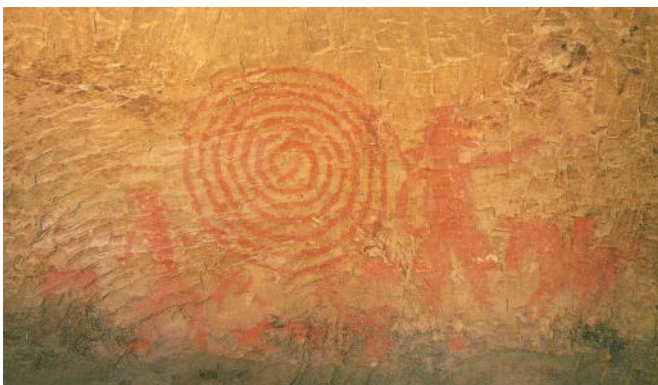
玄室奥壁に描かれた壁画は、筆を用い、赤色のベンガラで描いている。中央に七重の渦巻き、その右に手をかざした人物が描かれている。手をかざした人物は七六cmあり、古墳及び横穴墓の壁画に描かれている人物としては国内最大である。さらに右側には馬に乗って疾駆する人物がみられる。渦巻きの下には狩猟風景が描かれている。狩猟風景は、親子のシカ、それに向かい合う猟犬と背後には弓を持ち矢を放っている人物

が表現されている。また、イノシシと思われる動物に向かう鏃^{やじり}も表現されている。中央より左の画面には、手を広げた人物とウシのような動物も描かれている。

平成二一年に清戸迫横穴保存事業に伴う玄室内写真測量、指定地域の地形測量を実施した。このことにより指定地内外から後背墳丘と考えられるマウンド六基を確認している。後背墳丘とは、横穴墓



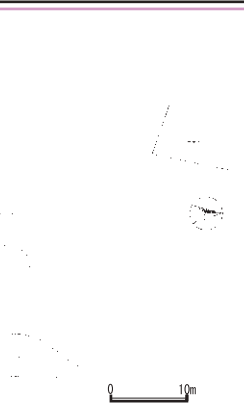
史跡清戸迫横穴



清戸迫横穴奥壁図文

の立地する丘陵上に作り出される墳丘状のマウンドで内部には埋葬施設を伴わない。マウンドは墳丘墓の外観を、横穴墓(玄室)は横穴式石室を模倣したものとされている。昭和四二年当時の調査で円墳として認識された古墳がある。報告書によると内部施設を伴っていないことから、これらは後背墳丘の可能性が高いと考えられる。近年、関東を中心に類例が増えており認知されつつある。

平成二一年に清戸迫横穴の保存事業に着手したが東日本震災により工事の中断を余儀なくされている。現在、帰還困難区域の中にあり容易に立ち入れない状態にあり、壁画の保存について憂慮されている。



墳群第1号墳



古墳全景（写真奥が那珂川河口）



周溝内埋葬施設



埋葬施設内石製模造品出土状況



周溝内遺物出土状況

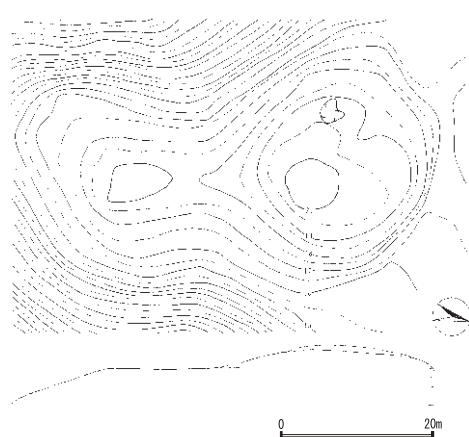


石製模造品

ぼんぼり山古墳



ノ上古墳群旭塚古墳



手前が前方部で、奥が後円部

寺前古墳

見学ガイド

所は、現在「殿山町」という地
と呼ばれていました。地名のと
墳が存在していたと思われます。

- * 和田ノ上古墳群は、津神社境内のものを見学することが出来ます。
- * 寺前古墳は、現在立ち入りが禁止されています。
- * 東塚原古墳群とぼんぼり山古墳は消滅により見る事が出来ません。

ひたちなか市の古墳

3 那珂湊地区の古墳群

ひがしつかはら 東塚原・和田ノ上古墳群， ぼんぼり山・寺前古墳 — てらまえ

港町として栄える那珂湊地区には、東塚原古墳群や和田ノ上古墳群、ぼんぼり山古墳、寺前古墳があります。

東塚原古墳群は、那珂湊市場から北に向かい、「姥の懐」と呼ばれる海岸のすぐ上の台地縁辺部に位置しています。1962年の確認調査では14基の古墳が確認されていましたが、現在はほとんどが開発により消滅しています。1989年には、第1号墳の発掘調査が行われています。第1号墳は、開発により一部削平を受けており、調査時は北側から西側にかけての墳丘が残存していただけでしたが、調査により直径約15m、高さ約2～3mの円墳であることがわかりました。埋葬施設もその大半が破壊されていましたが、側壁に自然石（砂岩）を使用し、床面には敷石が見られる長さ約3mの横穴式石室と推測できました。出土遺物は人骨と刀子片のみです。第1号墳発掘調査時には、当古墳群について周辺住民からの聞き取り調査が行われました。それによると、古墳は15～25m程度の円墳で構成されること、埋葬施設は海岸の石材を利用した小口積みの石室があること、出土遺物には大刀や刀子、鉄鏃、玉類があったことが判明しました。また、古墳群の時期は、6世紀後半から7世紀前半にかけてと推測されています。

和田ノ上古墳群は、ひたちなか市役所那珂湊支所の南側に位置しています。古墳の数は不明ですが、現在津神社境内に1基の古墳が残っています。この古墳は旭塚古墳とも呼ばれ、直径約20m、高さ約5mの円墳です。埴輪や甕石はみられません。この古墳の周辺にも数基の古墳があったとされ、1955年前後に破壊された古墳の石室からは大刀が出土したという記録が残されています。

ぼんぼり山古墳は、那珂湊中学校の南西側に位置しています。この古墳は1998年の船窪地区の区画整理事業に伴う発掘調査によって確認されました。墳丘は盛り土ではなく、基本的に丘陵先端の地形を利用し、これを削り出すことによって築造されたと考えられます。この工法では、北方向からの視線では墳丘に見えませんが、那珂川河口からの視線では丘陵全体が大きな墳丘となります。墳丘北側に確認された溝を周溝とすると、直径約30mの円墳となります。周溝内からは土器が出土しました。埋葬施設は周溝内にあり、木棺直葬と考えられます。出土遺物は石製模造品のみで、剣形18点、双孔円板15点、双孔が穿たれただけの剥片2点の合計35点です。古墳の時期は、溝内から出土した土器から5世紀後半と考えられます。

寺前古墳は、那珂湊地区西側の柳沢団地内に位置しています。墳丘は主軸長約50mの前方後円墳です。高さは前方部が約1.5m、後円部が約3.5mを測ります。発掘調査が行われていないため古墳についての詳細は不明ですが、墳形等から前期の時期が想定されることから、ひたちなか市内で最も古い古墳となる可能性があります。



第1号墳調査風景



埋葬施設

東塚原古墳



和田ノ上

ミニ知識

東塚原古墳群のある場所の名ですが、昔は「塚原」であり、昔はたくさんの古墳

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

勝田市における最初の調査は津田天神山遺跡であった。調査責任者は伊東重敏氏である。茨城に帰って、多くの研究者に積極的に交流することに努めた。そのなかで最初に出会ったのが伊東氏であった。当時の勝田中央公民館に出土資料が展示しており、そこで会った。しばらくして発掘調査の話が伊東氏から出され、協力することにした。

勝田市の遺跡調査が本格化したのは高度経済成長期であった。この時期は市史編纂事業が展開されていた。調査した主な遺跡には原の寺瓦窯跡、三反田遺跡、原山遺跡、遠原貝塚、大沼経塚、大平古墳等がある。

三反田遺跡 三反田遺跡は三反田小学校の敷地内にある。この遺跡については井上義安氏のグループによって資料紹介がなされており、その重要性については広く知られていた。調査の原因は教室の拡張工事に伴うもので体育館と本館の間について五次の調査が行われた。その結果、古墳時代初期の住居跡が検出され、住居内から完全形の土器が多数発見されたのである。

原の寺瓦窯跡 原の寺瓦窯跡は勝田三中の深谷真君によって発見された。勝田市史編纂事業の中で須恵窯や瓦窯跡についてはほとんど期待されていなかった。須恵器については長者ヶ谷津附近に存在したという意見もあり、分布調査を行ったが不明であった。瓦窯跡については存在しないものときめかかっていた。したがって同校の安島先生から生徒が瓦を採集したという話があった時に

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第12回 勝田市の遺跡の調査(5)



1979(昭和54)年12月～1980(昭和55)年1月
三反田蛭塚貝塚の発掘調査を視察



川崎 純徳

は半信半疑で現地調査を行った。現地には夥しい布目瓦片が採集され、状況から窯跡の存在が明らかとなった。馬渡埴輪製作遺跡の状況から工房跡、住居跡、粘土採掘坑等の存在も予想された。こうした遺構の検出も視野に入れて調査を進めることにしたのである。

遠原貝塚 遠原貝塚も縄文前期の地点貝塚として早くから知られていた遺跡の一つである。小規模な貝塚が数地点存在するところから地点貝塚と言う。貝殻は住居跡の中から検出された。土器の中には南関東や東北地方の土器もあり、当時の人々が広範囲に交流していたことが証明されたのである。釣針や各種の装身具など今日の生活文化につながるものも多く、人々の歴史や文化を考える上で重要な遺跡なのである。

重要な遺跡は各地にある。これらは偶然に発見されることも多い。偶然に発見された遺跡が歴史を大きく変えてしまうことも少なくない。こうした遺跡をどう守っていくかが今日の課題である。

大平古墳 勝田市の文化財行政の転機となったのが大平古墳である。それまでの保護行政は市文化財調査委員会にあった。委員会は大平古墳の調査をうけ、審議した結果、開発に反対し保存との結論を出した。一年余の協議のあと市長決裁という形で開発のために調査となった。これを契機にして文化財調査委員会は文化財保護審議会と名称を変え諮問機関に変わることになった。



ひたちなか市には、現在四五ヶ所一三四基の古墳が登録されています。これらの古墳については、『埋文だより』の中で「ひたちなか市の古墳」として紹介を始めました。展示では、『埋文だより』で紹介する古墳について、解説パネルや出土した遺物を使って、古墳についての理解を深めていただくことを目的としております。第一回目は、市内平磯地区に所在する三ツ塚古墳群を紹介しました。

古墳群の概要 当古墳群は平磯地内の平磯中学校敷地内および周辺に位置しています。古墳群の名称は、大きな古墳が三基並んでいたことから、地元で「三ツ塚」と呼ばれていたこと由来します。古墳の数は円墳一四基（第一三号墳は帆立貝形の可能性があります）で構成されます。中学校建設に伴い一基が湮滅したため、現在は第一・一三・一四号墳の三基しか残っていません。古墳の規模は、直径一〇～二〇mが

主体です。その他に、五〇mを超える県内でも大型の円墳が二基（第一二・一三号墳）存在します。

発掘調査は中学校建設に伴い、一九四九年と一九五七年に実施されました。調査の結果、埋葬施設では、箱式石棺（第一・一一号墳）や竪穴式石室（第六・九号墳）、横穴式石室（第二号墳）が確認されました。出土遺物では、円筒埴輪や人物埴輪、壺形埴輪、須恵器、土師器、大刀、鉄鏃、ガラス小玉、石製模造品などが出土しています。古墳の時期は、第一二号墳が五世紀初め、第八号墳が六世紀前半、第二号墳が六世紀末と推定されます。



第13号墳(上)と
墳丘にみられる
葺石(左)

特徴 第一二号墳や第二三号墳の五〇mを超える大型古墳には、墳丘に葺石がみられます。市内の古墳では、川子塚古墳や磯崎東古墳群、入道古墳群で見られますが、他の古墳では確認されていません。これらの古墳は海岸線に位置していますので、葺石は海を望む古墳の特徴と言えるかもしれません。

また、第一二号墳からは、二つの注目すべき遺物が出土しています。一つは突起のある蓋形土器です。この蓋形土器は、底に孔のある壺や小型の椀と組み合うと思われるもので、類例の少ない土器です。もう一つは、壺形埴輪です。円筒状の細長い胴部で、口縁部が二段に大きく開きます。口縁部や胴部上位には赤彩がみられます。この埴輪も他に類例のない遺物です。最近の調査では、那珂川対岸の大洗町にある日下ヶ塚古墳や車塚古墳で似たような埴輪が出土しており、古墳の時期からも関連性が注目されています。（稲田健一）



日下ヶ塚古墳出土の埴輪＊



寄贈者の皆様(*)に改めて感謝を申し上げ、ここに「いただきますもの。2」をご披露いたします。披露しますのは、二〇一〇年から二〇一三年までにいただいた市内外の資料の一部です。

旧石器 細石刃・細石刃核・植刃器のレプリカと石斧を紹介しました。細石刃はカッターの替刃のようなもので、槍先などの形をした植刃器にはめ込んで使われたと考えられています。日本では証拠となる遺物は出土していませんが、シベリアや中国に出土例があります。石器研究者の橋本勝雄氏が作成したレプリカは、後野遺跡出土の細石刃を解説する助けになります。石斧はホルンフェルス製で笠間市内のローム層中から発見されています。

縄文時代 まだ発掘されなかった小鍋沢遺跡の土器、縄文時代の遺物の少ない東原遺跡の土器、発掘調査で本郷東遺跡から出土した遺物と接合する土器片。いずれも、今後当該遺跡を

理解する助けとなるでしょう。また、岩手県の環状石斧は、県内では数点の出土例はあるものの市内ではまだ出土例のない珍しい資料です。新潟県の石鏃^{せきぞく}は市内各所から出土する石鏃との比較資料となります。

弥生時代 東中根遺跡群は弥生時代後期の「東中根式」土器の名称のもとになった遺跡群です。寄贈された二つの土器は、文様の特徴と出土位置から二つで一つの蓋付土器と考えられます。この土器が契機となって東中根清水遺跡の第四次調査が行われました。

古墳時代 三反田下高井地内の壺・高杯は三反田下高井遺跡の方形周溝墓と関連する新たな古墳の可能性をうかがわせるものでした。津田西山古墳群の壺は、津田地区の古墳時代前期集落の広がりと考え

える材料となります。田彦古墳群の人物埴輪は茨城県の特徴である青色顔料で彩色されています。以前に寄贈されている埴輪との関連が考えられます。(菊池順子)



足崎・小鍋沢遺跡の縄文土器

飛田 英世

私の母方の伯父は、那珂湊の考古マニアであった。藤本弥城先生が近所にお住まいだった関係から、よくその「お供」をしたそうである。そのため、母の実家に行くたびに、伯父の影響を受けるようになった。小学校の卒業が近づいていたころ、足崎の親せきの畑から、縄文土器が出た、というので、伯父と行ってみた。遺跡があるのは中根と三反田だけ、と妙な思い込みのあった私にとって、足崎から土器が出たこと自体、不思議であった。

当初、完形の土器に見えたが、下半分が刃物で切り取られたように、欠失していた。さらに、出土地点の周りには、土器片が散っているはず、という伯父の意見に従い、霜が溶けて、ぬかるむ畑を探し回ったが、一片の土器もなかった。

たった一個体だけ、忽然と地中より現れた縄文土器、その謎は、四〇年以上が経った今でも、私のなかでは、相変わらず謎のままである。

ひたちなか市出土の大刀

— X線写真撮影調査報告 —

稲田 健一



虎塚古墳群第1号墳石室内大刀出土状況

ひたちなか市の古墳や横穴墓からは、大刀（たち）が26口出土しています（図1）。発掘調査で出土した大刀については、実測図や写真が報告書に掲載されていますが、錆（さび）に覆われているものや鞘（さや）に収められている状態で出土したものについては、内部の状態が不明となっていました。そこで今回、X線写真を撮影し、大刀の内部を探ることにしました。この調査により新たな発見がありましたので、ご紹介します。

今回、X線写真撮影による調査を実施した遺物は、虎塚古墳群第一号墳出土大刀、磯崎東古墳群第二四（旧二）号墳出土大刀、十五郎穴横穴墓群出土支群第三二号墓出土大刀、同第三五号墓出土鉄製品等である。本報告ではその一部を紹介する。なおX線写真撮影は、福島大学行政政策学類考古学研究室と菊地芳朗氏にご協力いただいた。

虎塚古墳群第一号墳出土大刀

当遺物は、一九七三（昭和四八）年の発掘調査で出土したものである。出土した古墳は、全長五・六・五mの前方後円墳で、築造時期は七世紀初頭と考えられる。横穴式石室は後円部墳丘内に位置し、全長約四・六m、幅は床面で約一・五m、高さ約一・五mを測る。石室壁面には、ベンガラによる装飾文様が描かれている。石室内からは、一体の成人男性の骨と、大刀一口、刀子一口、「毛抜形鉄器」一点、鉄鏃一点、槍鉋一点、透かしのある鉄片一点が出土している。大刀は、遺骸の胸部から腹部にかけて置かれていたものと推測されている（上写真）。

大刀は、外装の残存状況がきわめて良好な資料である。全長は把頭部の一部が欠失し、鞘尻金具が遊離しているため不明であるが、推定長は三八cmとされる。把頭部には銀製の紐通し環がみられる。把部は、把頭側に銅製の責金具、鞘口側に銀製のやや太めの責金具があり、その間は木質の上に紐が巻き付けられている。さら

に、把部全体に黒漆が塗られていた痕跡が確認できる。鞘部は、銀製の鞘口金具と二つの吊金具が装着されており、把部と同様に木質の上には黒漆と思われるものの付着がみられる。遊離している鞘尻金具は、銀製の責金具の上に鉄製の鞘尻金具をかぶせるようにしているのがわかる。このような観察から、当大刀は、全体に黒漆が塗られ、金具が銀色に輝く豪華な大刀であることが想像できる。

この大刀は外装の残存状況が非常に良好なた



図1 ひたちなか市大刀出土古墳・横穴墓の分布図

め、刀身の観察が不可能であった。そのため、X線写真撮影を実施し、刀身を観察することとなった。撮影の結果、銀製金具を透過することが出来ず、^{まち}関部の形状は判明しなかったが、刀身のおおよその姿が判明し、^{きつさき}鋒の形状(図2A)も明らかとなった。また、把部の刃側に台形状の凹み(図2B)があることが判明した。

磯崎東古墳群第二四(旧二)号墳出土大刀

当遺物は、一九六七(昭和四二)年の国民宿舎白亜紀荘(現・ホテルニュー白亜紀)建設に伴う工事の際に検出した石棺内から出土した。報告書によると、古墳は太平洋戦争中に墳丘の南西部が壊されていたため詳細は明らかに出来ない状況であったが、調査により直径約一七m、高さ約二・三mの円墳と推定されている。墳丘には、埴輪列が確認されている。石棺は全長一・九五m、幅は床面で〇・六m、深さ〇・五mを測る。前後の壁は、それぞれ一枚の自然石を用い、側壁は自然石が三段に積み上げられていた。床面には厚さ三cmの粘土を敷き、その上に海岸の白色礫^{れき}が薄く敷かれていた。石棺内からは一体分の人骨と、大刀一口、骨鏃^{こつぞく}一四点、鉄鏃^{てつぞく}一〇数点が出土している。

今回調査を実施した大刀は、鞘の残存状況が非常に良好な資料である。残存長は七四・八cmを測る。鞘部はほぼすべてが残存しており、六一・八cmある。実測図を作成した齊藤新氏によると、鞘の形状は鞘尻部に向かって太くなり、

鞘尻部で微妙な段差を付けて鞘尾^{さやお}金具があるような効果を持たせている。鞘口金具はない。木質は三枚合わせで、側面二枚と上面一枚で構成される。鞘表面には植物の蔓^{つた}が隙間なく巻き付けられており、鞘口部に近い部分は皮革と思われる帯状の物が巻き付けられている。柄元部には柄元金具状の刀装具があり、素材は皮革の可能性が指摘されている。刀身は、鞘部の残存が良好いため不明であった。また、出土時は図3のAの部分で鞘が破損していたため内部観察が可能で、この場所に刀身がないことが確認されて

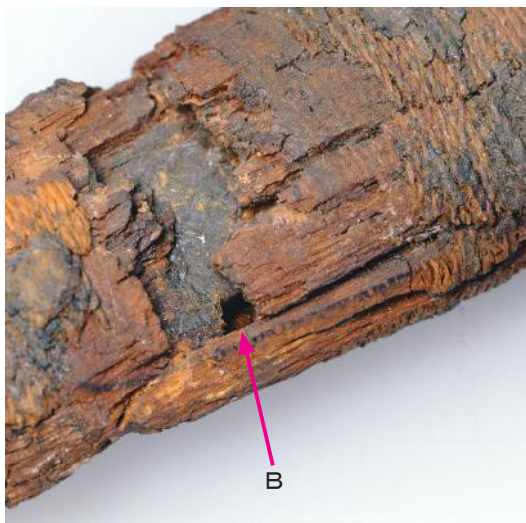


写真1 虎塚古墳群第1号墳出土大刀把部凹み

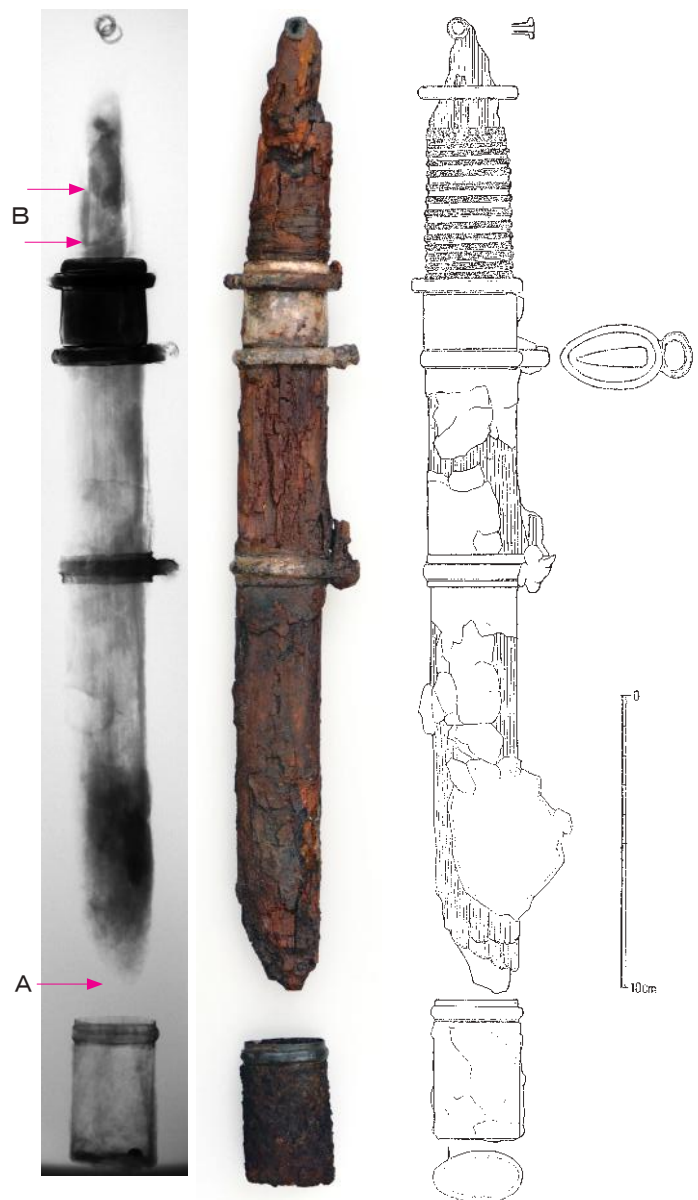
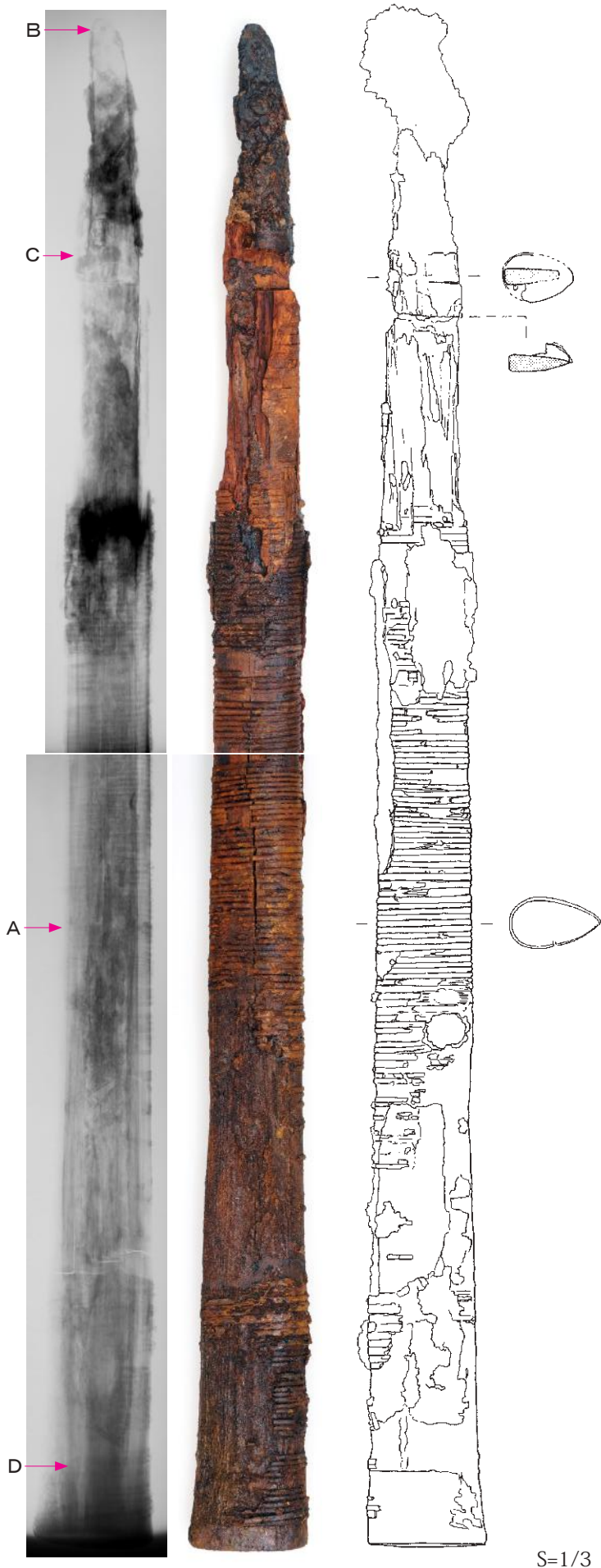


図2 虎塚古墳群第1号墳出土大刀(実測図は報告書より転載)



S=1/3

図3 磯崎東古墳群第24号墳出土大刀(写真は実測図の裏側の面/実測図は報告書より転載)

いることから(写真2)、短い刀身ではないかということが予想されていた。今回のX線写真撮影による調査は、このように予想された刀身の状況を把握することも目的とされた。

X線写真を観察すると、鞘内部の刀身をはっきりと確認することが出来ず、刀身の長さを知ることが叶わなかった。ただし、次のようなことが観察できた。一つは、図3のBに目釘穴と思われる孔がみられること。二つめは、Cの場所が関部であること。三つめは、Dに鋒とかわる形状がみられることである。三つめについて

ては、出土時の観察から刀身ではなく、刀身状に削られた鞘内部が映し出されていると思われる。このことから、刀身については、元々短身である刀を鞘に収めていたということか、あるいは当初は鞘内部の形状に合う長身の刀(推定長七・一cm)であったが、破損するなどの理由により短身になったものを収めているという二つのことが推測される。

十五郎穴横穴墓群館出支群第三号墓出土大刀
当遺物は、一九五〇(昭和二五)年に未開口の状態を確認された横穴墓の玄室内より出土し



写真2 磯崎東古墳群第24号墳出土時の破断面(写真は図3のAの断面)

たものである。出土した横穴墓は、平面形逆台形で、横・縦断面はアーチ形を呈す。規模は、主軸長約一・九m、最大幅約二m、高さ約〇・七mを測る。玄室内からは、大刀一口、鉄釘三六点、把手状金具四点などが出土している。大刀は、鞘部の木質の大半が失われているが、金具類の残存状況は良好な資料である。全長は把部の一部が欠失しているため不明であるが、推定長は約八〇cmとされる。金具類はすべて銅製である。把頭部には長い覆輪で貴金具を装着する段がみられる。鐔つばは小型で、把縁と一体化している。鞘口部には呑口筒金ののみぐちを双脚足金物そうきやくあしかなもので留めている。鞘部には、もう一点の双脚足金物

と、柏葉の貴金具、把頭に似た形状の鞘尻金具がみられる。鞘部に残る木質表面には、黒漆と思われるものの付着がみられることから、「黒作大刀」とされる。また、外装から奈良県正倉院御物の第二六号黒作大刀に類似していることが指摘されている「鴨志田二〇〇三」。大刀の時期については、把頭・鞘尻金具の中央に突起や切り込みがなく、銅製双脚足金物であることから、七世紀後半から八世紀中葉と推定される「津野二〇一〇」。

この大刀は外装の残存状況がわるいため、刀身の観察は比較的出来る状態にある。しかし、鋒の形状が不明であった。そのため、X線写真撮影を実施したところ、鋒の形状が両刃であることが明らかとなった。この点については、津野仁氏から指摘があったことであるが、それが証明されたことになる。

今回の調査により、三点の資料について新しい情報を得ることが出来た。今後このような調査を続け、出土した遺物のより詳細な情報を探っていこうと思う。

参考文献 鴨志田篤二二〇〇三「十五郎穴横穴墓群出土の黒作大刀」『領域の研究』／津野仁二〇一〇「日本刀の成立過程―木柄刀と古代刀の変遷―」『考古学雑誌』九四―三

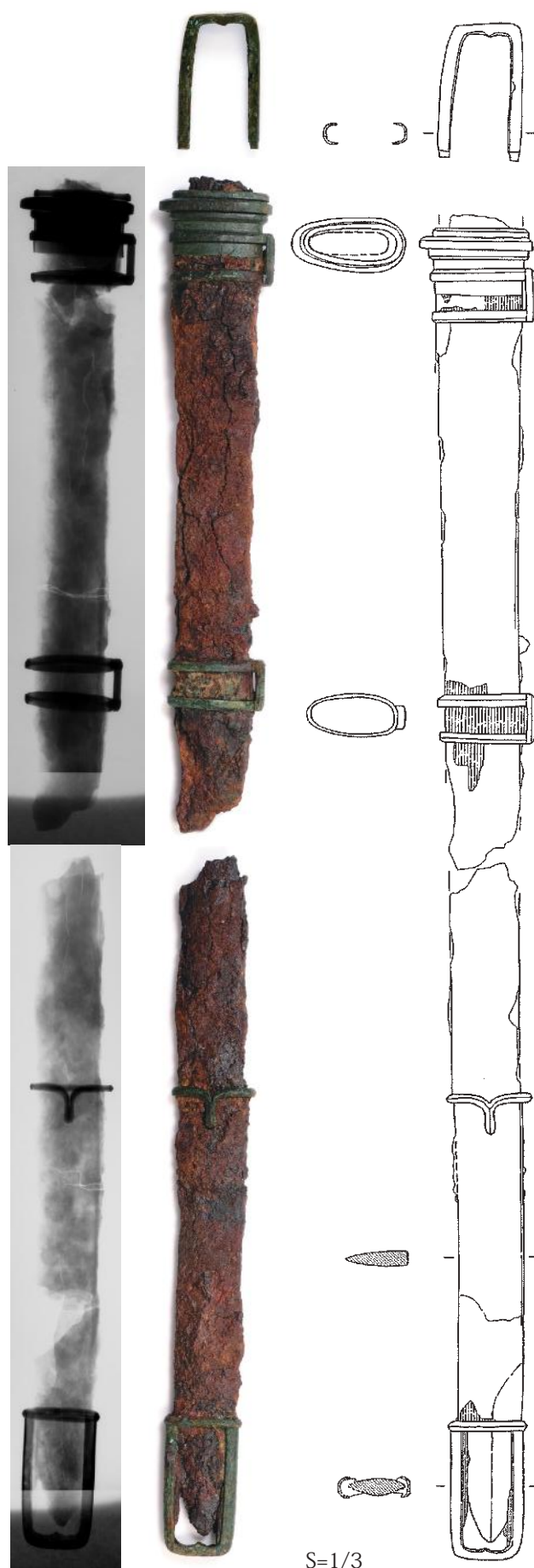


図4 十五郎穴横穴墓群館出支群第32号墓出土大刀
(実測図は[津野 2010]より転載)

文の々 埋センター 日 2013 後期

10月

3 弥生土器焼成実験



／6 ふるさと考古学⑥「貝の考古学」講師・黒住耐二氏／10 水彩サークル遊画資料写生



／12 ふるさと考古学⑦「住居の考古学」講師・さかいひろこ氏／16 台風26号被害



／17 中根小学校2年生社会科見学



23 設楽健太氏（明治大学生）資料閲覧
【虎塚古墳他出土鉄鏝】／24 水彩サークル遊画資料写生／27 田彦中学校地域づくりの会見学／29 結城市山川文化会館見学／中根小学校1年生社会科見学

11月

1 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学



クラブツーリズム見学／筑波大学生見学／14 虎塚古墳一般公開



2 ふるさと考古学⑧「壁画の考古学」講師・堀江武史氏／3 しも

つけ風土記の丘友の会見学／4 ジオツアー見学／6 かすみがうら市郷土資料館より資料返却【武田遺跡群ほか炭化種子】／6 勝田第三中学校2年生職場体験



「三反田小学校6年生社会科見学／毎日旅行見学／壬生町はにわ会見学／10 虎塚古墳一般公開／8 群馬県渋川市公民館見学／9 ふるさと考古学⑨「土の考古学」講師・田村憲司氏／10 埴輪研究会見学／16 ひたちなか市史跡保存対策委員会／17 ワンケースミュージアム29「ひたちなか市の古墳を探る」終了／20-21 大島中学校2年生職場体験／佐野中学校2年生職場体験／20 ひたちなかふるさと塾／史跡編／（於ワークアラザ）「ひたちなか市の古墳時代の遺跡」／21 ひたちなかふるさと塾／史跡編／（於ワークアラザ）「ひたちなか市の奈良・平安時代の遺跡」／23 ワンケースミュージアム30



12 ヘビイチゴ

虎塚古墳の下田んぼに水が満たされる頃、道ばたに黄色い花が目立つようになります。それが今回ご紹介するヘビイチゴです。この花は、バラ科キジムシロ属の植物です。花は葉の脇から出て、花弁は五枚で黄色です。茎は地面を張って長く伸び、葉は楕円形で、ふちがギザギザしています。花が終わると、赤い実をつけます。実に毒はないそうですが、美味しくもないそうです。

花の名前の由来には、ヘビが食べるイチゴとか、ヘビがいそうな場所に生育するとか、イチゴを食べに来る小動物をヘビが狙うからとか、諸説あるそうです。ヘビが嫌いな私にとっては、この花が咲く頃から古墳や横穴墓の見学を控える時期になります。



2011.4.24

「いただきます。2010-2013
年度寄贈資料」開始／23ふるさと
考古学⑩「フィールド探検」(講
師・矢野徳也氏)／28雷遺跡・枯
松戸遺跡試掘調査開始



30ふるさと考古学⑪「食の考古
学」(講師・田野島万由子氏)

12月

「ふるさと考古学⑫」とっても楽
しい考古学」講師・さかいひろこ
氏)／35五郎穴横穴墓群試掘調
査開始／那珂市文化支援協議会見
学／5雷遺跡試掘調査終了／6茨
城県立歴史館より資料返却【乳飲み
児壺輪ほか】／枯松戸遺跡試掘調査終
了／10東石川小学校5年生校外
学習／13常陸太田市幸久公民館
見学／遊久俳句会見学



17-21 堀口遺跡試掘調査
1月

15石塚勝氏資料寄贈【佐和地内採集
土器】／水沼美代氏資料寄贈【部田野
地内採集土器・石器】／17ワンケ
ミュージアム30終了／25埋蔵文
化財調査センター開館20周年記
念講演会(講師・忽那敬三氏)



26第11回企画展「常陸国の須恵器
生産」開始／26第6回記録集『弥
生時代後期の北関東』発行



2月

26ひたちなか市の考古学第7回
①「茨城県北半部の須恵器流通」
(講師・佐々木義則)／18堀口遺
跡本発掘調査開始／23ひたちな
か市の考古学第7回②「埼玉県南
比企窯跡群産須恵器の生産と流

通(講師・渡辺一氏)／25柴田遺
跡試掘調査開始
3月

26ひたちなか市の考古学第7回③
「バリ島における土器の生産と流
通」(講師・余語琢磨氏)／6水戸
市埋蔵文化財調査センター貝塚塾見学／「柴
田遺跡試掘調査・堀口遺跡本発掘
調査終了」／9ひたちなか市の考古
学第7回④「群馬県域の土器の生
産と流通」(講師・桜岡正信氏)／
11「足崎天神山遺跡試掘調査」／
14「平成25年度市内遺跡発掘調査
報告書」発行／20五郎穴横穴墓
群試掘調査終了／22ワンケ
ミュージアム31「絵になる埴輪」水
彩サークル遊画が描いた井上廣明コレクション」開始／2730虎塚古墳一般公
開／31埋文だより」第40号発行

入館者状況 (2013.10.1.～2014.3.31)

月	開館 日数	個人 (人)	団体 (団体)	計 (人)
10月	27	176	9 (2)	226 (70)
11月	26	1006	24 (4)	465 (70)
12月	23	68	7 (1)	159 (8)
1月	23	123	3 (0)	52 (0)
2月	24	83	6 (0)	127 (0)
3月	26	522	7 (0)	133 (0)
合計	149	1978	56 (7)	1162 (148)

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公
財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開
催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホーム
ページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の 笑う埴輪

公開講座「ひたちなか市の考古学」が七回を
数えた。公社がセンター事業を受託するのを
機に、名称を「やさしい埋蔵文化財講座」から
変更して実施した回数だ。ただ名称を変更し
ただけではない。毎回の講座の内容を刊行物
として記録化することにした。したがって、
講師の方々には、実際の講座から記録集の刊
行までのお付き合いを了解していただくこと
になる。大変な負担に違いない。割に合わない
手間暇だけでなく、後からも講義の質を問
われるからだ。これまで全て快諾のもとに記
録集を刊行してきた。ライブが収録されるコ
ンサートとなれば、演者も張り切りざるを得
まい、という魂胆は見透かされているだろう。

各講座の冒頭には、講師による自己紹介が
ある。これは、主催者が「先生」を紹介するの
が常道。邪道ながら、「Q1 考古学に興味を
持ったきっかけ」、「Q2 考古学を学んだ経
緯と恩師」、「Q3 研究テーマを選んだ理由」
という三つの間に、自ら答えていただくこと
が、公開講座「ひたちなか市の考古学」の名物
として定着している。この趣向は、第一回に
代役で司会を担当することにな
ったが、講師の
略歴と業績を調
べるのが億劫で
誕生した。



(2014.2.16)



ひたちなか埋文だより 第40号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 Tel. 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 弘美印刷株式会社

2014年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター